

アカデミアとの連携策検討に向けた 学会等のヒアリングについて

2023年12月21日

標準化とアカデミアとの連携に関する検討会事務局

国内審議団体を引き受けている学会ヒアリングの結果概要（1）

【取り組みの中心は企業会員？アカデミア？】

- 標準化活動に特化した会費で実施している学会では、企業会員が中心
- 通常の学会会費で実施している学会では、アカデミアが主導、または関係国研が主導
- 経緯上、国際標準化活動を実施している学会では、会員以外の企業、アカデミアも参加

【国際標準化活動にかかる学会会員へ普及啓発活動】

- 学会の全国大会でのディスカッションセッションを実施
- 学会における特定テーマにかかる討論会、研究会で定期的に国際標準化活動を報告
- 学会誌に活動状況を掲載
- 標準化に特化した学会誌を年1回発行

【国際標準化活動にかかる資金の状況】

- 通常会費
- 標準化活動に特化した会費を収集
- 関係工業会からの委託
- 経産省からの委託費（プロジェクトもの、旅費支援）

国内審議団体を引き受けている学会ヒアリングの結果概要（2）

【国際標準化活動に関する人材育成の概要】

- 企業、研究機関の若年層は「標準化」をほとんど知らない。大学教育の中に含めるべき。
- 標準化関係の委員会の委員長等の後継人材は「属人的」に行われていること。
- 可能な範囲で国際標準化活動の主体者を一世代若返らせる試みが必要。

【アカデミアの方々の国際標準化活動に関する評価】

- 現段階ではアカデミアの方々の学術評価は主に論文の質と数。ISO、JISの活動（委員会活動）は学術評価の対象になりにくいこと。
- 現在国際標準化活動の中心に位置づけられるアカデミアの方々は過去の経緯上活動していること。
- 国際標準化そのものではないが、学会基準にかかる活動は評価の対象となっていること。

ヒアリング結果を踏まえたカテゴライズ

【カテゴリー1】

学会の国際標準活動に一定数以上のアカデミアが参加しており、定常的にISO等の国際会議に出席し、かつ主体的な提案活動を実施していることから、学会内部で人材育成における講師等を調達できる可能性があること。また既に学会広報誌、学会年次大会における報告、国際標準化活動の報告セミナー等を実施していること。

【カテゴリー2】

学会本体とは別に国際標準化活動にかかる組織を設置し、積極的に国際標準化活動に参加しているが、同組織での活動の主体は企業であり、学会本体とのブリッジングが未確立であること。

【カテゴリー3】

学会名で国際標準化活動を実施しているものの、学会 자체が担当しているテーマは少なく、該当TC等への対応主体は関係工業会であること。

【カテゴリー4】

学会にアカデミアがほとんど参加しておらず、過去の経緯から学会の「事務局」が国内委員会の事務局を担っているのみであること。

学会ヒアリングの結果を踏まえた今後の施策の方向性（1）

- カテゴリー1の学会については、今までの普及活動の実績を踏まえて、若手アカデミアを対象としたセミナー等の実施を検討いただく。
- カテゴリー2の学会については、活動の主体が産業界であるものの、アカデミアの方々の協力もいただいていることから、学会本体の活動の一環として、国際標準化に関する報告会、セミナー等の実施を検討いただく。
- カテゴリー1及びカテゴリー2の学会については、上記の活動にとどまらずに具体的な人材育成に関する活動についても検討いただく。
* 経済産業省も必要に応じて財政サポートについて検討する。

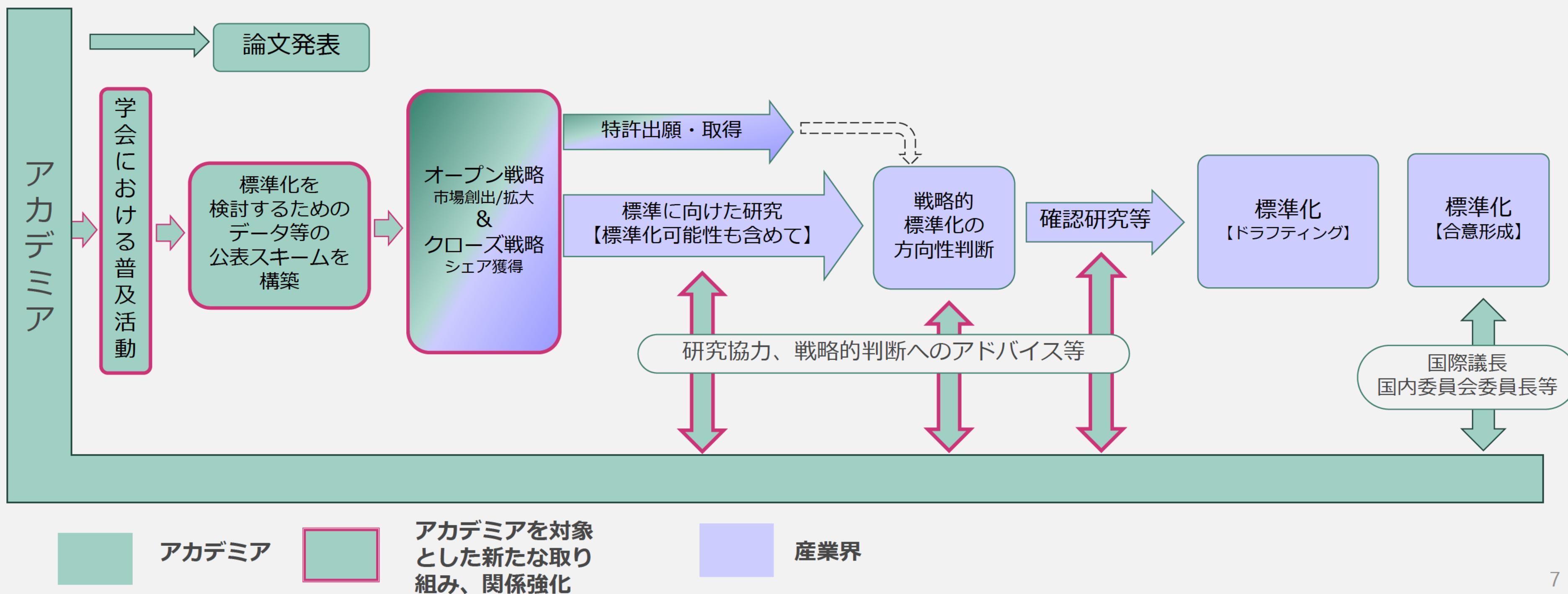
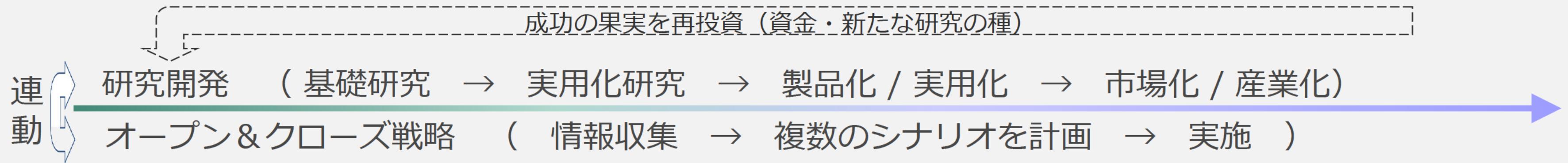
【国内審議団体以外の学会について】

- 国内審議団体ではないが、標準化活動に関心を有している学会、規格のユーザーとして関心を有している学会についても、標準化の重要性をご理解・ご認識いただくセミナー等の開催を検討いただく。

学会ヒアリングの結果を踏まえた今後の施策の方向性（2）

- 現在国内審議団体を引き受けている学会における国内対応委員会の委員長等の主導的な立場にいらっしゃるアカデミアの方々のご認識は以下のとおり。
 - 継続的な国際標準化活動の観点から、若手アカデミアの参加は必要と考えるが、現段階では標準化活動は学術評価の対象となっていないこと。
 - アカデミアの評価の対象として「社会貢献（標準化活動は該当）」もあるが、国際規格の制定プロセスは3年以上を要し、国際会議・交渉も頻繁であることから、若手アカデミアの参加を促しにくいくこと。
 - 通常の学会経費（会費収入）の範囲では、国際標準化活動の強化は困難であること。
- 一方で、我が国の標準化活動の形態を踏まえると、学会における対応のみならず工業会主体の対応の場合もアカデミアの方々の参加は不可欠であること。
- 学会における標準化の重要性にかかる活動の普及活動、教育プログラムの実施だけではなく、若手アカデミアが標準化活動に着目するような新たなインフラ整備も必要。例えば、論文の基礎となった研究データについて、学会をプラットフォームとして、標準化可能性検討（社会実装）の観点から学会企業会員がアクセス可能なスキームの構築を検討してはどうか。
- 上記のスキームの構築によって、若手アカデミアの方々にとっても標準化との接点が生まれ、また産業界にとってもデータ等の裏付けのある、足腰のしっかりとした国際提案が可能となり、我が国の標準化活動の強化にもつながるのではないか。
- さらに、アカデミア、産業界の研究者の共通のプラットフォームである学会における標準化活動も活性化され、ひいては、企業会員の増加（会費収入増）にもつながるのではないか。

研究開発から標準化へのプロセスにおける産業界とアカデミアとの 継続的かつ有機的な連携体制の構築



標準化とアカデミア連携のイメージ